

重要無形文化財保持者に 幸正佳さんが選ばれました



■重要無形文化財保持者

演劇・音楽・工芸技術などの無形の文化的所産で、わが国にとって歴史上または芸術上価値の高いものを「無形文化財」といいます。国は、無形文化財のうち重要なものを「重要無形文化財」に指定し、そのわざを高度に体现している人を保持者または保持団体に認定しています。

日本の伝統技能である「能楽」の幸流小鼓方十九世宗家の幸正佳さん（小郡市在住）が7月18日、国の文化審議会の答申で、重要無形文化財保持者に選ばれました。

幸さんは、5月に父の後を継ぎ、幸流小鼓方十九世宗家に就き、幸流31人を束ねています。舞台や稽古で九州各地や東京など巡るかたわら、能楽を伝えるために小中学校で体験学習を開催しています。

今回は、インタビュー形式で紹介します。

——重要無形文化財保持者に選ばれ、おめでとう
ございます。能はいつ頃から始められたのでしょうか

6歳ぐらいに初舞台を踏んだと思います。どう
やって打っていたのかは覚えていませんが。その後
も、父の主催する社中会などで打たせてもらってい
ました。ただ、子どもの頃は、小鼓のことが嫌い
で、もっと友だちと遊びたいと思っていました。

——同じく重要無形文化財保持者である祖父の宣
佳さんから手ほどきを受けたこともあるのでは

おそらく手ほどきを受けていたんだろうと思いま
す。祖父は私が6歳の頃に亡くなったので、あまり
教えてもらった記憶はないですね。縁側で抱っこさ
れていたことをよく覚えていますね。

能楽全体を学ぶことで 能が楽しくなってきた

——小鼓のことが嫌いだったということですが、
いつ頃からこの道でやっていこうと決意されたので
しょうか

19歳で京都に弟子入りをしてからです。ね。
福岡では同じ道を進んでいる同年代の人は少ない
んですよ。土日は仕事で友だちと遊ぶこともできな

い。しかし、京都に行くと同じ道を進んでいる同年
代の仲間が多いんですよ。始めは多くの仲間がいる
ことが楽しかったですね。

そして、京都で小鼓だけでなく能楽全体を学び、
わかってきたら、おもしろい。楽しくなってきました
ね。段々と。

能楽には指揮者がいない。だから、 掛け声で意思の疎通をはかる

——囃子方の中で小鼓の役割とは

囃子方は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4人がいるの
ですが、みんな重要なんです。

笛が入るときには笛が、太鼓が入るときには太鼓
がリズムをつくります。その中で一番難しいのは、
掛け声。能楽では、指揮者がいないから、掛け声で
お互いの意思の疎通をはかるんです。

また、それぞれが自分の主張や思いを持っている
ので、その思いを合わせることも重要です。
だから、小鼓は絶対こうだというようなものはな
いと私は思っているんですよ。

——小鼓を打っているときはどのような心境です
か

若い頃は間違えないようにと思っていましたね。
最近では何も考えず、無の状態で打っています。能

楽では、掛け声や音で意思疎通をはかっているため、
周りを聞かないといけません。何かを考えていると、
周りを聞けていないということになります。無の状
態で常に周りに向かってアンテナを張っていますね。

「能楽」という言葉を まずは知ってほしい

——小学校などにも教えに行かれているとのこと
ですが

参加している福岡市能楽協議会で県内の小学校で
小学生を対象に体験学習会を行っています。

実際に囃子を披露し、内容や意味の解説をした後
に、曲の一句を謡ってもらったり、小鼓などを打っ
てもらったり、能楽に触れてもらっています。

能楽は伝統芸能ですが、若い方にはあまり知られ
ていません。まずは知ってもらいたいですね。

——最後に、市民の皆さんへメッセージをお願い
します

難しい、敷居が高いものと思われてしまっていま
すが、まずは気軽に見に来てほしいと思っています。
能は見ている人にとって想像の世界です。いろんな
ものを見て、いろんな想像をしたらえればと思い
ます。そして、室町時代から続いているという素晴
らしさを感じてもらえればと思います。